

## 論 文 要 旨

氏 名	益田 修太郎
タイトル (日英併記)	<p style="text-align: center;">Impact of Gender and Physical Differences on the Development of Oral Functions in Children Aged 6-17 Years: A Cross-Sectional Study</p> <p style="text-align: center;">6-17 歳小児における性別と体格の違いが口腔機能の発達におよぼす影響 —横断研究—</p>
<p><b>論文の要旨</b></p> <p>本研究の目的は、男性と女性の口腔機能の発達が完了する年齢を明らかにすること、肥満が口腔機能の発達不全に影響をおよぼすかどうかを明らかにすることである。対象は6歳から17歳の男性121人、女性120人の計241人で、身体測定と口腔内診査の後、最大咬合圧、口唇閉鎖力、最大舌圧、および咀嚼能力を測定し、男女別に年齢間で比較を行った。次に、年齢および測定値との間の関連性を明らかにするため、Spearmanの順位相関係数を使用して二変量解析を行った。さらに、16歳未満の対象者のRohrer指数と16歳と17歳の対象者の体格指数(BMI)から対象者を低体重/やせ、標準体重、および過体重/肥満の3群に分類して男女別に測定値の比較を行った。男性の最大咬合圧、口唇閉鎖力、最大舌圧、および咀嚼能力は年齢とともに増加した。女性の最大咬合圧と最大舌圧は16歳でピークに達し、6歳と7歳よりも有意に高値を示した (<math>p &lt; 0.05</math>)。女性の口唇閉鎖力は7歳から17歳まで比較的横ばい傾向を示し、すべての年齢間で有意差は認められなかった。女性の咀嚼能力は17歳でピークに達し、6歳と7歳よりも有意に高値を示したが (<math>p &lt; 0.05</math>)、成長速度は男性よりもゆっくりであった。二変量解析の結果、男性の咀嚼能力は体重と有意な正の相関関係を示した (<math>\rho = 0.557, p &lt; 0.01</math>)。しかし、男性の過体重/肥満群の咀嚼能力は、標準体重群よりも有意に低かった (<math>p &lt; 0.05</math>)。女性では、低体重/やせ群の最大咬合圧と過体重/肥満群の最大舌圧が正常体重群よりも有意に低かった (<math>p &lt; 0.05</math>)。各口腔機能の成長パターンは男女間で大きく異なり、女性の口腔機能は男性よりも早くピークに達することが明らかとなった。過体重や肥満は男女ともに口腔機能発達不全の一因となりうること、女性の場合、低体重ややせもまた口腔機能の発達を妨げる可能性があることが示唆された。</p>	